

生活科

山 岸 留 美
中 山 良 恵

1 生活科における知識創造とは

実感から生まれる
気づき

生活科の学習は、子どもが自分と自分の身近な人々や社会、自然とかかわる様々な活動や体験が基盤となる。学校や地域を探検し季節みつけをしたり、お気に入りの場所を見つけ友だちに知らせたり、動植物を育てて世話をしたり、ものを作って遊んだりというような「ひと・もの・こと」に夢中になって楽しんでかかわる活動のなかで、子どもがそれら対象を実感し、気づきを生み出していくことができる。

生活科の知識とは

このように、生活科の知識は、取り出してその知識の習得だけを目標に指導するのではなく、学習過程において(活動や体験を通して)身に付けさせるものである。子どもが今までの生活経験や学習の中で獲得した知識(感性・経験知)に、すすんで取り組んだ活動のなかで得られた、実感を伴った新しい気づき加わる。それが知識となり、次の活動を実現するための必要な知識として構築される。

気づきとは

生活科での気づきには、次の3つがある。①知的な気づき②情緒的な気づき③自己への気づきである。

交流から生まれる
新たな気づき

知識を習得するうえでかかせないのが、友達や他学年とのかかわりである。対象への働きかけのしかたや友だちとの協力のしかたをいろいろ工夫していくなかで、実感から生み出された気づきを交流し紹介し合ったり、比べ考えたりすることで、自分の気づきを再確認し、さらに新たな気づきを生み出し気づきの質を高めていくことができると考えている。

気づきが生活の中で生きて働く
知恵となる

また、学習で生まれた気づきを「わかった」「できた」で終わらせるのではなく、生活の中で試してみる、応用してみる、継続していくなど、自分の生活に生かしていこうとすることも大切である。そうすることで、それぞれの気づきが生活と結びつき、生きて働く知恵となっていくからである。

生活科における
知識創造の定義

これら一連の営みを生活科における知識創造ととらえる。つまり、生活科における知識創造を以下のように定義する。

自分なりの思いや願いをもって「ひと・もの・こと」とかかわる活動や体験を通して「ひと・もの・こと」に対する実感を伴った気づきを工夫しながら生活に生かしていこうとする営み

2 知識創造を育むために

(1) かかわりの「場」のデザイン

実感する体験を
重視

実感する体験を重視した活動のデザインとして、体のさまざまな感覚をはたらかせる活動や体験、気づきや思いの交流、共通体験や実感を伴った追体験をさせることがあげられる。これらを繰り返すことで、子どもの気づきは実感を伴い、自分の既知の事実と関連づけ、自分の行動の幅を広げ、生活に生かしていこうとする姿が見られるようになると考える。

(2) 「かかわり」の活性化

気づきの質の
向上

気づきの質をより高めていくには、実感から生み出された気づきを紹介し合い比べ考えていくことが必要である。そのための手だてとして、「かかわり」の必要感をもたせる、体の様々な感覚を磨かせる、共通体験と選択活動を組み合わせ設定する、追体験により友達の気づきを実感させる、気づきの表出方法を工夫することがあげられる。

(3) プロセスの自覚

学習のめあての自覚	子ども自身が自分の願いを実現させたいという強い思いで「ひと・もの・こと」にかかわることが、気づきを生み出す原動力になる。学習のねらいを明確に持たせながら学習を進めていくことが、自分の活動をふり返り、自分の変容を自覚させることにつながる。
活動の見つめ直し	「ひと・もの・こと」への気づきで終わらせないで、自分自身の変化・成長への気づきにつながるように、ワークシートや学習カードを使うなど自分の活動を見つめ直させることが必要である。

3 「活用する姿」をめざして

活用する姿とは	生活科における活用する姿とは、今までに獲得された知識(感性、経験知)をもとに、新たな活動を通して得た個々の気づきが、友達や他学年と交流し共有し合うなかで関連づけられ、さらに気づきの質を高めていく姿と捉える。そして得られた気づきが次の活動で知識として効果的に用いられて、生活のなかに結びついて生きる知恵となる。
---------	--

(1) 獲得する知識の価値づけ

願いの掘り起こし	知識創造をめざすためには、自分がどうなりたいか子どもの願いの掘り起こしを十分に行い、その願いが実現できるよう道筋を示し活動を組んでいく。一人一人の思いが膨らみ、多様な気づきが生まれるような教材の選定を行う。 子どもが夢中になって活動し対象にじっくりとかかわり、五感を働かせて得られた気づきをカードなどに表す。そして全体で交流することで、多くの知識が洗い出される。その知識を分類することで、知識が整理され関連づけられて、次の活動に生かされる知識となる。よって分類することは、子どもの気づきの質を高めるための手だてとなる。
知識を洗い出し分類する	
かかわりから生まれる評価	また交流するなかで、自分の気づきと友だちの気づきを比べて考える機会が生まれる。友だちの気づきをさらに実感を伴ってとらえることができるよう、実際に体験しながら確かめ、対象に繰り返しかかわる活動を設定する。そうして多様な見方や考え方、感じ方を知る機会となり、評価しあう眼も育つと考えられる。

(2) 気づきを見つめ直す表現活動

思考と表現は一体	身近な環境や自分自身についての気づきの質を高めるために、活動したことをふり返り、自分なりに整理したり、そこでの気づきを他の人たちと伝え合ったりする学習活動(言葉や絵、動作、劇化などで表す活動)を充実させる。ただ、表現の出来栄のみを目指すのではなく、考える力と表現する力が一体的に育つようにしていくために、学習の中で「みつける」「くらべる」だけでなく「たとえる」ことで気づきの言語化を図る。表現では、友達が何を知りたいのか予想し、どうしてそうなるのか理由を述べるなど表現の視点も与えながら支援することで、思考が深まると考えられる。
----------	--

(3) 長期的な取り組み

自己の成長に気づく活動記録や掲示	活動の記録を蓄積し、それを学習に生かすことは大切である。継続した活動のなかで、ポートフォリオなど活動の足跡が具体的に想起できるような教室掲示があれば、それをもとに今の学習と前の学習を比べて考えることができる。そうして全体をふり返ることで、自分の成長にも気づくことになる。 子どもには、この時期にしか経験できないことがたくさんあり、それらの経験が様々な発達の可能性をひろげていく。1,2年を通して「いつ」「どのような」活動を設定するのか、その中で子どもに「どんな力」を身につけさせたいのかを明確に持ちながら、子どもがこんな自分になれたらいいなああとゴールでの自分の姿や成長がイメージできるよう見通しを持たせ学習を進めることが重要である。
科学的なものの見方・考え方の基礎	また、中学年以降の理科・社会の学習を視野に入れて、自然や社会への「不思議さ」「面白さ」など知的好奇心を高め、「なぜ」と考える探究的な学びの基礎が身につくように意識して取り組んでいきたい。

4 実践例 - 1年 -

単元名 ぼくたちわたしたち、かしわっこ探検隊！！

(1) 本単元による知識創造

学校の施設やもの そこにいる人とかかわる活動を通して 学校の様子や人の存在に気づき
これからの学校生活を安心して楽しく送ろうとする営み

入学してから二ヶ月が経ち、子どもは少しずつ学校生活に慣れてきた。しかし、入学をきっかけに生活の仕方が大きく変わったため、戸惑う様子も見られる。そこで、探検をして学校の様子を知ることで、子どもにとって学校が楽しく安心して生活できる場所になるようにしたいと考えた。

本単元では、子どもが学校にはどんな教室があるのか見に行きたいという願いをもち、実際に学校探検をすることで、今まで知らなかった教室やそこにあるもの、人と出会うことになる。これまでの生活経験で子どもは、学校には教室が多くあり先生がいて、上級生が自分たちと同じように学習していることは、何となくわかっているだろう。しかし、どんな教室があるのか、そこで何をしているのか、そしてどんな先生がいるのか実際に目にする機会は少なかった。そこで今回探検をすることで、今まで何となく見聞きしていたことが実感を持った気づきになると考える。

学校の教室を探検すると、教室にあるものは見つけやすいが、人の存在は、意識しないと見過ごすことが多いため、子どもから積極的にかかわることは少ないだろう。これからの学校生活で先生の顔や名前を知ってかかわりながら過ごすことは、子どもにとって大切であるので、掲示板に学校中の先生の顔写真を貼っておき、子どもの意識が先生にも向くようにする。そして名前がわかったら顔写真の下に掲示していくなど、かかわった成果が目に見えて表れるように工夫する。このことで、先生にかかわろうとする意欲を高めていく。子どもは今まで自分から知らない先生にかかわる経験がほとんどない。そのため、不安がある子どももいると思われるので、ペアで話を聞きに行くなどかかわり方も工夫していきたい。安心してかかわれるようにし、かかわれたことを認めて自信を持たせていきたい。

また、自分で見て気づきを増やすだけではなく、友だちと気づいたものやことを紹介し合う場面を設けることで、自分がまだ探検していない教室にも関心を高め、教室を見るときの見方(人・もの・様子)を増やすことができ、探検が充実していくだろう。学校の様々な教室に関心をもち、見方を増やしながら繰り返し探検を行い、気づきの質を高め、本単元における知識創造に迫っていききたい。単元の終わりに、お気に入りの教室について発表する場面を設けて、自分の探検をふりかえり、学校について詳しくなったことを互いに認め合い、学習の仕方や友だちとのかかわりのよさにも気づくようにする。この単元の学習を通して、子どもにとって学校が親しみのある場所になることを期待している。そして今後の学校生活を子どもが安心して楽しく送ることができるようにと願っている。

(2) 知識創造の力を育むために

① かかわりの「場」のデザイン

学校に関する一人一人の気づきの質を高めるために、次のことを行う。クラス全体での活動からペアでの活動という流れを設定する。

探検は子どもにとって初めての体験なので、最初は何を見てきてよいかわからない子もいるだろう。そこで、初めに体育館という共通の場所を全員で探検し、見つけたものを交流し合う機会を設ける。友だちの気づきと自分の気づきを聞きくらべることで、ペアでの探検で何を見てくるとよいのかという見方を広げることができると思う。

② 「かかわり」の活性化

次の探検への意欲が高まり、個々の気づきが豊かになるように交流の場面を設定する。同じ教室を探検しても人によって見てくるものが違うことや、探検に行く場所が様々あるということに気づかせると子どもの見方を広げることができると思った。そして、見方を広げると、この後の探検での気づきが豊かになり、気づきの質を高めることになると考えた。そのためにペアでの探検や、クラス全体での交流の場面を設定して、気づきを伝え合い、共有してくらべ合うことができるようにする。

③ プロセスの自覚

学校探検前の自分の気づきと探検の後の自分の気づきをくらべる。学校に詳しくなった自分に気づき、自分自身の成長を感じることができるだろう。また、学習をふり返る中で、友だちとのかかわりのよさやものの見方の有用性など学び方のよさを自覚させていきたい。今後も、友だちとかかわりながら学習をする姿や、ものの見方を意識して調べようとする姿、学校生活を楽しみながら過ごす姿へとつながることを期待する。

(3) 「活用する姿」をめざして

本単元のめざす活用する姿は、意欲を持って繰り返し探検し、見てきたもの・様子・人を交流し合う活動を通して、ものの見方やかかわる対象を広げ、気づきの質を高め学校に親しんでいく姿と考えている。

ものの見方を広げるとは、見る側の眼のつけ方に気づくことであり、対象を広げるとは、身近なところから知らない場所、そして人へとかかわりを広げることである。

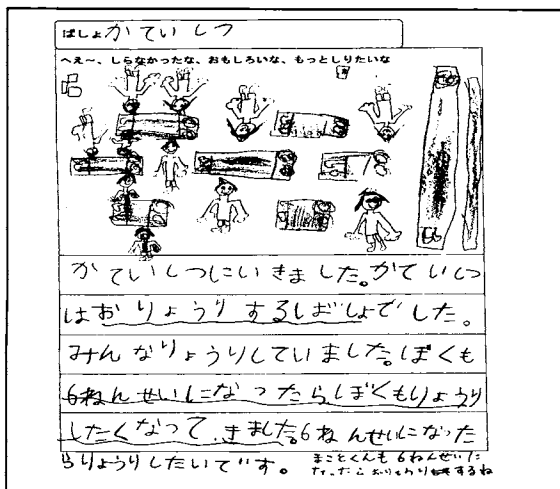
この姿をめざして、知識の価値づけや気づきを見つめ直す表現活動を工夫し、知識創造につなげたい。

(4) 単元計画（総時数 14 時間）

主な授業デザイン	モード	知識創造の流れ
1 学校探検の計画を立てる ・今まで行ったことのある教室を挙げ まだよく知らない教室があることを知る ・学校にはどんな教室があるのか探検することを知る ・クラス全体で学校の中を1階から3階まで見てまわり、学校にはたくさん教室があることを知る ・学校の中をもっとくわしく見に行く計画を立てる	想起	<ul style="list-style-type: none"> ・1Fはだいたいもう知っているよ ・2・3Fはどうなっているのかな？ ・行ってみたい ・6年生の教室は3階にあるんだね ・職員室は何階にあるのかな？ ・図工室って何をする教室なのかな？ ・中を見てみたい
2 クラス全体で体育館を探検する ・体育館にどんなものがあるか見つけて出し合う ・見つけ方を知る	共有	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館にはボールや肋木、ロープなどがある ・見つけるときは 上や下もみるといろんなことが見つけられそうだよ
3 グループで行ってみたい場所や回る順番を相談し決める ・探検の約束を考える ・困った時の対応の仕方（保健室・職員室）を知る	表出	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼく達のグループは ○○へ行こう ・何の教室かな ・廊下の歩き方に気をつけて 一年生らしく探検しよう
4 グループで探検する ・グループで行きたい教室に行き、部屋の様子を見て感想を交流する	活用	<ul style="list-style-type: none"> ・保健室にはベットやぬいぐるみがあったよ ・音楽室にはいろんな楽器があるな ・お兄ちゃんたちの歌声がきれいだよ
5 探検した教室のクイズをつくる ・教師のヒントの見本を見て クイズの作り方を知る ・ペアでクイズを作り 練習をする	表出	<ul style="list-style-type: none"> ・4つのヒントを出すといいのだな ・○階もヒントになる ・ものもヒントに使えるそうだ ・友だちとなかよくクイズを出すよ うまくいえるかな
6 クイズを紹介し合う ・友だちのクイズを聞き答えを考える ・ふりかえりをする	活用	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちはどんなクイズを出すかな 答えを当てたいな
7 行きたい場所を繰り返し探検する ・グループやクラス全体での探検をする ・対象を人にも広げる	活用	<ul style="list-style-type: none"> ・きっと○○だ だってこのヒントでわかったよ ・次は○○へ行きたいな だってね・・・ ・もっと詳しく見てきたいな ・だんだん学校にくわしくなってきたよ ・学校には先生もいるよ 先生とも仲よくなりたいな
8 学校の先生ともなかよくなるよう ・先生の写真を見て知っている先生と知らない先生がいることに気づく ・先生の名前を聞きに行き 握手をしてくる	表出	<ul style="list-style-type: none"> ・知っている先生と まだ知らない先生がいるよ ・何ていう先生かな ・先生に名前を教えてもらおう ・学校探検で先生とも仲良くなったよ よかったな
9 ぼくのわたしのお気に入りの教室を紹介しよう ・今まで書きためたカードを見直し お気に入りの場所やものなど紹介する ・互いの成長を認め合い これからの学校生活に期待を寄せる	表出 意味化	<ul style="list-style-type: none"> ・学校のことがいろいろわかった ・前は知らない部屋や人がいっぱいあったけど 今では もうどこでも行けるよ ・これからの学校生活が楽しみだな

- ・ぼくは、おんがくしつとランチルームとそうじばをわかつているよ。でもがっこうをあるいたら、へやがもっといっぱいあったよ。ぼくは、りかしつにいてみたいよ。
- ・わたしは、がっこうをたくさんあるけてうれしかったよ。へやもたくさんみられてうれしかったよ。なかにもはいてみたいよ。
- ・グレンせんせいがあるへやがわかってうれしかったよ。もっといろんなところへいきたいです。
- ・たいいくかんへいくとちゆう、ずこうしつというへやがあったよ。どんなことをしているのかな。

資料1 学校全体を歩いてみたふりかえり



資料2 探検後のふりかえり



写真1 ○○先生、よろしくお願いします



写真2 先生の名前を知り掲示板で全校に紹介

(5) 授業の実際と考察

本単元では、学校の施設やもの、人とかかわることを通して、学校の人の存在に気づき、これからの学校生活を安心して楽しく送ろうとする営みを知識創造ととらえ、実践した。知識創造を充実させるためには、次の2点を重要と考え気づきの質を高める手だてとした。2点とは、①知識の価値づけ ②気づきを見つめ直す表現活動である。この2点について子どもの姿をもとにふりかえり、手だてについて、知識創造を充実させるためにはどうすればいいかを考察する。

① 知識の価値づけ

ア 願いを掘り起こす

気づきの質を高めるためには、まず気づきを生むことが重要である。自分がどうなりたいか子どもの願いを掘り起こすことは気づきを生む原動力になる。今回の学校探検では、学校の中を探検したいという願いをもち、夢中になって探検することが知識の獲得につながる考えた。子どもの実態は、学校にはどんな教室があって人がいるのか、どんなことをしているのか見聞きしているようでもまだまだ不確かなことが多く、個人差も大きい。どの子も学校探検へ願いがもてるように学校に関心を向ける場面を設けた。また、人へのかかわりを広げていく場面では掲示を工夫して、願いをもって活動できるようにした。

⑦ 単元の導入で学校に関心を向ける

すでにどんな教室を知っているかを思い出させた。子どもは、これまでの生活経験から、行ったことのある教室を想起していた。子どもがよく知っている教室とは、自分の教室はもちろん、授業で使う体育館、第1音楽室、図書室、そして行事でよく利用したランチルーム、保健室、そうじ場所、兄弟のいる教室等であった。しかし、そうじ場所や兄弟のいる教室は、本人以外はかかわりがなく、知らない教室が他にもたくさんありそうだと気づくことができた。また、名前は知っているけどよく知らない教室もあると気づいた。知っている教室を思い出すことで知らない教室の存在に気づき、学校のことをもっと知りたいという単元を通した子どもの願いへとつながった。資料1は、初めて探検して名前を知ったときの子どものふりかえりである。探検へ願いをもって出かけることで、気づきが生まれていることがわかる。

また、資料2は家庭室に探検に行った後のふりかえりである。願いを持って探検に行くことで、教室や人への気づきが増し、自分の将来の姿を楽しみにすることができた。

① 先生にも関心を向ける

教室だけでなく先生にも関心を向けさせたいと考えた。先生について知ることや自らかかわりをもつことは、今後子どもが学校生活を送る上で大切である。子どもの実態は、知っている先生は1年生の先生と教

科で習う先生、そしてそうじ場の先生などが中心で、他は同じ学校にいても、ほとんどが名前もよくわからない状態であった。

そこで、先生に関心が向くように、職員の顔写真を掲示しておいた。子どもはそれを見て、知っている先生を見つけたり名前を言い合ったりするうちに学校にはたくさんの先生がいることに気づき、学校にいる先生全体にも関心が向いた。そして、全員の名前を調べて全校のみんなにも教えたいという願いにつながっていった。一人で先生を探して話を聞くことには不安な子どもも多くいたので、学校探検の時のように友だちとペアになって名前を聞いてくることにした。(写真1) このことで友だちと誘い合って先生に会いに行く姿が見られた。最初は担任の名前や、授業で日ごろよくかかわる先生の名前しか知らなかった子は、多くの先生とかかわることを通して顔と名前を知り、とても喜んでいて。また、最初に掲示板に名前を付けない先生の写真をはり出した。子どもは自分たちが調べた先生の名前を書きだし、最後に全員の名前が掲げられた。その掲示を見ることで、学校の先生がわかった喜びを感じていた。(写真2)

願いをもってかかわることは、気づきを生み出すとがわかった。また、ペアで活動することで安心感をもつことや自分たちが得た知識を見やすく掲示すると学びのよさを実感することができるとわかった。

先生の名前を聞いてきた後に、「どんな先生だった？」など先生とのやりとり(インタビュー)や、先生とのふれ合いを思い起こさせることで、温かさに気づき、より親しみをもつことができたと考える。(資料3)

イ 体育館を全員で見に行き、見方を知る(知識化)

全員で校舎を簡単に回った後、共通の教室に出かけて、この後の探検に行くときの見方を全員が共有できるように考えた。そこで、クラス全員で体育館を探検し、気づいたことを出し合った。子どもは前に学校探検した時の「目を使って見つける」を活用することで、肋木やターザンロープ、バスケットゴール、体育館の2階に置いてある椅子、放送設備等に気づくことができた。また、今までの生活経験を想起してものを探している姿もあった。体育の時間にボールを使った経験を思い出してボールを探したり、先生や体育係がよく出入りしていた倉庫に行ってフラフープやカラーコーンなど体育で使う様々な道具を見つけたりすることもできた。そして、これらの気づきを出し合う中で、ものを見るときには、よく見るのが大切で、目の前だけでなく、体育館の壁や上・下の方にも眼を向けて見ると、発見がふえることに気づいた子どももいた。それを全体に広め価値づけることで、後の探検でもっと目を使って上や下の方をよく見てこようとする姿が見られるようになった。

コンピュータールームを探検したときに、下にじゅうたんがひいてあることに気づき、クイズで「床にじゅうたんがひいてあります。」と紹介をしていた。(資料4) また家庭室を探検したときに天井にも眼を向けて「上に大きな鏡があるよ。」と気づいた子が数人いた。(資料5) このときは、なぜ鏡がこんなところにあるのだろうと疑問が湧き、クラスで鏡の訳を話し合っ「お料理を作っているのをみんなが見られるようにするためだね。」と思考が深まり、気づきの質が高まっていった。家庭

- ・ ○○せんせいは、やさしかったです。
- ・ ○○せんせいは、おもしろいあそびをおしえてくれました。
- ・ ともだちとパントリーのおじさんになまえをきいてみたら、まえは○○さんだったのに、かわったのがおもしろかったです。そしてもっとせんせいのなまえをしりたいです。
- ・ 5ねん1くみのせんせいが、りかがすきなんておもいもしなかったので、びっくりしました。
- ・ ○○せんせいはなまえをかくのをまちがえたとき、わらうのがおもしろかったです。
- ・ ○○せんせいは、せがたかいです。わたしのおにいちゃんのせんせいです。
- ・ まえはともだちのおにいちゃんのせんせいは、ちょっとあったことがあったけど、なまえはしりませんでした。でもいまは○○せんせいとかわかって、うれしかったです。

資料3 子どものふりかえり

だいいひと

3かいにあります。

だいいひとわかるひと。

じゅうたんがあります。

だいいひとわかるひと。

はそこんかたくさんあります。

わかったひとは いまですか？わかるひと。

せいは

コンピュータールーム です。

資料4 コンピュータールームのクイズ

ばしめがていしつ。

へー、しらなかったな、おもしろいな、もっとしりたいな

つくえのなんかなりのところをあげたら

れいどうとかあたよせんたくきが2だい

あたよれいどうのところにスポンジも

ありました。おり、うりをしたりミシンをしたり

するおへやだとおもいます。せんせい

すわるつくえのうえにかがみがあったよ。

資料5 家庭室の教師用テーブルの上の鏡

室の場合は、「鏡がある」という気づきと「料理をするところ」という気づきが結びつくことで鏡の役割にも気づく姿が見られたと考える。

このように共通の場所を探検し気づきを共有することは、ものの見方を広げるために有効であった。特に上や下にも眼を向けると発見が増えるという価値づけをしたことで、気づきが明確になり、次に使える知識として子どもに意識をさせることができるとわかった。家庭室の場合のように、価値づけると気づきが増え、その後の気づきと気づきが結びついて気づきの質を高めることができた。

② 気づきを見つめ直す表現活動

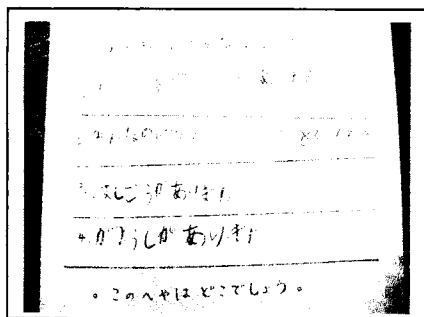
ア 気づきを見直すクイズづくり (かかわりの活性化)

気づきを見直すことで、気づきを明確にし、気づきの質を高めたいと考えた。そこで、クイズづくりの場を設け、自分の気づきを見つめ直す活動を行った。

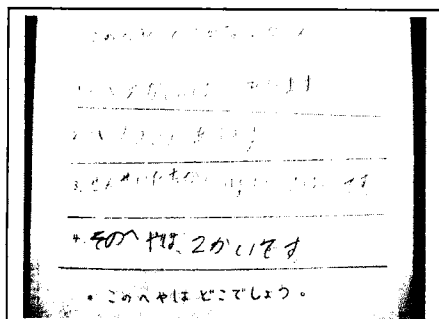
クイズづくりもクイズを出すことも1年生にとっては初めての経験となるので、教師が最初に見本をみせることにした。

- ・その部屋は、2階にあります。(位置)
- ・その部屋には、大きなソファがあります。(もの)
- ・その部屋には、賞状やトロフィーがあります。(もの)
- ・その部屋は、学校長先生や副校長先生が使います。(人)

資料6 教師の提示した4つのヒント



資料7 子どもがつくったクイズの例



資料8 子どもがつくったクイズの例

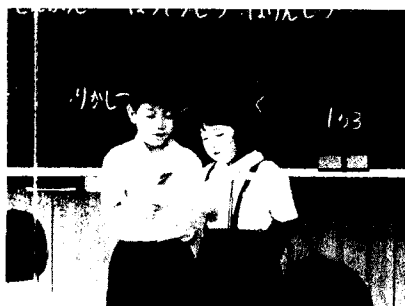


写真3 クイズの紹介の様子

どの子も教師の出したクイズを生活経験や学校探検を想起して聞き、どの教室なのか楽しんで当てていた。クイズのやり方がわかると自分たちもクイズを出したいという意欲が生まれ、クイズづくりに取り組む姿につながった。

意欲はあるものの、クイズづくりは初めてなので一人では戸惑うことが予想された。そこで、安心して取り組むことができるように探検の時に一緒に見てきたペアでクイズをつくることにした。同じ教室を見てきたペアだからこそ、気づきが共有され自分たちの探検カードをじっくり見ながら、クイズを考える姿につながった。

教師が見本として提示したクイズは、4つのヒントからできていて(資料3)、学校の位置(階)や見てきたもの、人などを入れて紹介をした。クイズのつくり方がわかると、提示されたヒントをもとに自分が紹介したい教室の気づきを見直し、友だちと一緒に工夫をしてクイズづくりに活かすことができた。(資料7・8)

子どもがつくったヒントの中には教室の特徴がそれぞれ豊かにあらわれていた。このことから、クイズをするという場面を設定して、クイズをつくりながら友だちとかかわり合い気づきを見つめ直す活動は、気づきの質を高めることにつながったと考える。

イ クイズでの交流 (よさの共有)

気づきの質を高めるために、探検の途中で教室についてわかったことを交流し合う機会を設けた。自分が探検した教室のことをペアで相談してクイズにし、クラス全体に紹介した。教室の紹介がクイズという活動であったため、作ったクイズを話したい気持ちが高まり、普段よりもたくさんの子が教室について紹介することができた。(写真3) また、聞く側も友だちのクイズを楽しみながら真剣に聞くことができた。クイズの教室がどこなのかを当てるために、探検で行った場所や生活経験を想起して、部屋を推測して聞いていた。クイズを出す方も当てる方もクイズの交流を通して自分の気づきを見つめ直すことができ、有効だったと考える。

しかし、交流会で出された知識を次の活用できる知識にするためには、以下の3点が必要だったと考える。

⑦ 次に行ってみたい教室が見つかるような手だて (可視化)

学校の中は広く、たくさんの教室がある。クイズを交流することで出てきた教室が、次の行きたい教室の参考になるようにと考えていた。また、出てこなかった教室にも眼を向けて選ぶことができればとも考えていた。クイズを聞いた子どもの関心は、交流会で紹介された教室に向いていたことがふりかえりからわかった。「友だちが言っていたものを自分でも見て来たい。」と意欲を持つ

子どももいた。しかし紹介に出てこなかった教室に関心を広げることは難しかった。どのような手だてがあれば、探検していない教室に眼を向けることができたかを考えた。一回目の学校探検で見て来た教室を模造紙などに書きいれて掲示し、今回行った教室とくらべることでまだ行っていない教室を区別して提示する方法があった。また、探検した教室を挙げていくとまだ探検していない教室に気づくような、板書の工夫が必要だった。このように、可視化すると子どもは次に行く教室を選びやすくなったと思われる。

① 様々な気づきを分類する

子どもがつくったクイズには、「そこは、天井が高いところです。(体育館)」や「そこには、みんなのプリントを印刷する機械があります。(職員室)」など教室の特徴がよくあらわされていた。これらの気づきを次に活かすためには、気づきのよさを認め、人・もの・広さや高さ・位置(階)・様子などに色別に分類する方法があった。よさを認め分類することで次からの見方が明確になり、気づきの質を高めることができたと考える。

・くらべることでより気づきの質を高める

子どものクイズには、「6年教室の机や椅子は大きい。」や「体育館は広い。」などの自分のものや自分の教室とくらべて同じところや違うところに気づいているものがあつた。今後の探検でもくらべることでその教室の役割や特徴がはっきりすると考えたので、教師は「どことくらべたの?」「どうして大きいのだろう?」と問い返しをしたが、クイズを紹介している途中でははっきりさせることができなかつた。それは、子どもがこの時間はクイズをしたいという気持ちが強く、話し合う必要を感じていなかったためと考える。クイズが一段落して満足してから、教師が問い返しやゆさぶりをを行い、子どもの思考を深めるとよかつた。(資料9) そうすれば、くらべることのよさを意識できたのではないかと考える。

ウ 見方や対象を意識させる掲示(可視化)

体育館で見てきたことやクイズの紹介の場面で出てきた様々な見方を、今後も意識して使えるように掲示をした。掲示をしたことで、最初は教室の場所やその中にあるものだけに向いていた眼が、次の探検では人の様子にも向けられるようになった。

また、自分たちがどの場所に出かけてどんな気づきを得てきたのかわかるように、クラスで発表をした後、そのカードを模造紙に貼って掲示した(写真4)。「校長室には賞状などが飾ってあつたよ。」や「理科室は葡萄のにおいがしたよ。」など様々な気づきがあるので、それを見て次に行きたい場所を考えている姿もあつた。子どもが得た知識を伝えるように掲示し意識づけることで、気づきの質を高めていくことがわかつた。

(6) 成果と課題

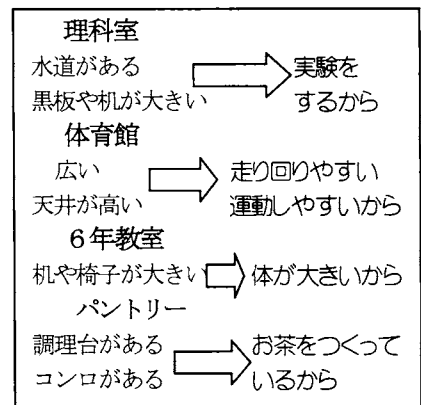
本単元でめざした知識創造は、「学校の施設やもの、そこにいる人とかわる活動を通して、学校の様子や人の存在に気づき、これからの学校生活を安心して楽しく送ろうとする」であつた。学習の初めには、知っている教室や人は少なかつたが、探検やその紹介、まとめなどの活動を通して学校について自分なりに気づきを持ち、関心を向けるようになったことから、めざす知識創造にせまることができたと考える。

その原動力となつたのは、学校のことを知りたいという子どもの願いであり、子どもの願いの掘り起しが重要なことが改めて明らかになつた。

1年生のこの時期は繰り返し様々な教室に出かけて、自分の目で多くの「ひと・もの・こと」に出会い気づきを増やしていくことが、大切である。

また、自分の気づきを見つめ直す場面では、友だちとかわるることが一人一人の見方や対象を広げるために有効であることがわかつた。

課題としては、子どもの気づきを分類して価値づけることが十分でない、その後の活動で十分に活用が行われないということが明らかになつた。子どもの思考を深めるためには、くらべる対象を持たせることや子どもの気づきと気づきをつなげるなどの教師の支援が必要である。子どもが獲得する知識を価値づけする意味で、教師の問い返しや揺さぶりは重要な手だてになるとわかつた。今後の学習では、これらを実践に生かし、子どもの気づきの質を高めていきたい。



資料9 子どもの気づきから役割や特徴をはっきりさせる

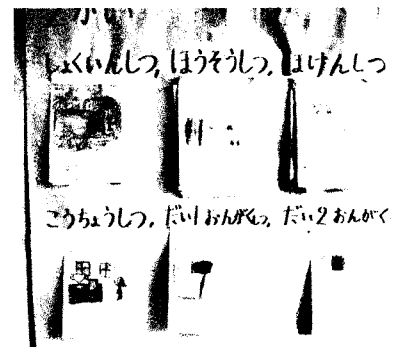


写真4 教室の気づきをまとめる